

日本語の形成

『長田夏樹論述集（下）』第23章

（原載：『日本の生活の母胎』河出書房新社，1975年10月）

第一節は「美濃と筑紫の古代日本語」（『著作集（下）』第18章）の要約。サ行音を『日本書紀』歌謡の代表字がどう表しているかに基づき、上代日本語の方言を中央方言、筑紫方言、東国方言に分ける。第二節では『魏志』倭人伝によって上古日本語前期の日本語を探る。この部分は『著作集（下）』第14章の要約。中国原音は3Cの洛陽音とし、中古模韻相当韻の推定音価を[a]とする。そして邪馬台国北九州説を主張する。第三節では農耕語彙に着目して朝鮮語と日本語の同源語彙を比較し、弥生時代初期の日本語を探る。具体的には日本語と朝鮮語の農耕語彙及び紡織・季節語彙の比較である。第四節では日朝共通基語の比定を論ずる。先ず学説史及び資料の紹介とともに上代日本語と中世朝鮮語の同源語彙を比較し、共通基語形を挙げる。そして最後に母音及び語頭子音の対応表を示す。日朝両方の文献資料の吟味、背景にある歴史的状況への配慮は極めて周到になされており、余人の追隨を許さない。但しこの方面の門外漢の勝手な印象を申し述べれば、日本語と朝鮮語は音節構造及び音素配列上の制約の面で似たところがある。どの程度似ていれば同源と判断できるのか。特に類似の度合が高くない場合、偶然の類似をどこまで排除できるか難しいところがあるように思う。更に忌憚なく付け加えれば、作業仮説上、両者の語彙が同源であると見なすからにはその双方への変化を説明できるような推定音価を再構する訳であるが、このあたりは何人も成功していないところである。先生の挙げる例も残念ながら万人を納得させるまでには至っていないように思う。

なお初出のときには章扉に「奴児永寧寺碑・女真蒙古文積図」、第一節に「大宝二年籍帳」の書影を挙げていたが、『邪馬台国の言語』では前者を省き、『著作集』では後者も省いている。前者は『著作集（下）』第11章に見える。 （太田斎）